

「裁縫」から「被服製作」への 展開過程における裁縫と手芸

The Needlework and the Handcraft in the process that
were changed the Characteristic to Design from Needlework

田 中 陽 子

I. 緒 言

1879（明治12）年の教育令により設置された小学校裁縫科において、教育内容は「通常の上着」の裁ち方・縫い方を主体としながらも、昭和初期になると裁ち縫いのみならず衣生活全体を対象にした教育の必要性が主張され¹⁾、その影響は教授書や教授細目にも及んだ。このような裁ち縫い中心の教育から衣服の選択・購入、管理、更生等の衣生活事情を反映した教育への指向は、戦後の家政・家庭科教育における被服教育へと引き継がれていった。

戦後中学校の被服製作は、主として日常着や休養着等の製作・手入れと編物・刺繍等の手芸品の製作で構成され、なかでも衣服製作は被服教育の中心的位置を占めていた。ところが、被服製作に関する内容は、2008年版学習指導要領では小学校で「生活に役立つ物の製作」、中学校で「布を用いた物の製作」となり、長時間を必要とする大掛かりな衣服製作は省かれ、創意工夫しながら楽しくできる製作学習へと変わりつつある。また、「布を用いた物の製作」では製作を「生活を豊かにするための工夫」に結びつけており、基礎的・基本的な知識と技術を活用させることに重きを移している。

裁縫科教育の戦後家庭科教育への影響と継承を問うには、尋常科裁縫か

ら小学校家庭科、高等科裁縫から中学校家庭科への展開を確認する必要があるが、高等科裁縫ならびに中学校家庭科の教材に加えられていた衣服製作が近年に至り削除されていることに着目すれば、被服製作は転換期にある。ありていに言えば、教材を衣服から実用的生活用品に変更した上で、製作技術の習得から工夫創造の能力養成へと製作学習の主眼を変化させている。

ところで、従前の被服製作において創意工夫を担う分野は主として手芸であった。しかし、2008年版学習指導要領に「手芸」は表出せず、「布を用いた物の製作」については、「主として補修の技術を生かしてできる製作品」であることを明示し、手芸品とは明確に区別している。うがった見方をすれば、戦前の女子教育や製作を主眼とした被服教育との関係が濃厚な「手芸」を消すことで、現代的課題に対応した被服教育を展望しているとも考えられる。結果、「生活に役立つ物の製作」「布を用いた物の製作」は、従前の被服製作を構成していた衣服の製作とも手芸品の製作とも異なる製作教材になったと判断される。

以上の問題を踏まえた上で被服製作の教育内容及び教材を明確にするためには、被服製作の位相を、衣服製作及び手芸品の製作の視点から明らかにする必要がある。また、布を用いた物品製作という点で言えば、戦前からの裁縫・手芸教育を引き継いでおり、裁縫と手芸との歴史的な関係を明らかにする必要がある。あまつさえ、1930・40年代には裁縫と手芸との関係が議論され、1938（昭和13）年には家事及裁縫社主催で「全国裁縫手芸研究発表大会」²⁾が開かれた。1930・40年代と言えば、衣生活全体を対象にした教育論が昂揚していた時期である。つまり、裁縫科教育が将来の方向を模索していた時期に、手芸教育が何らかの影響を果たしていたと考える。なお、裁縫科及び家庭科の歴史を対象にした先行研究において裁縫と手芸の関係について取り上げた報告は見出せなかった。

以上から、本稿では「裁縫」から展開した被服製作の位相を衣服製作と手芸品の製作の関係から捉えるために、主として「全国裁縫手芸研究発表大会」での発表をもとに、裁縫科教師と手工科教師の間で生じていた手芸教育をめぐる齟齬を整理するとともに、小学校裁縫科で手芸との関係が重

視された要因を教育方法・内容に着目して検討する。資料に用いたのは、昭和期に入ってから終戦期前までに発行された「家事及裁縫」「教育研究」の2種類の雑誌、及び裁縫教育関係図書である。雑誌「家事及裁縫」は1927（昭和2）年の創刊後、「家事裁縫」「家政教育」「家庭科教育」と改題を重ねながらも、2005（平成17）年3月の休刊まで発行された。また、雑誌「教育研究」は1904（明治37）年に東京高等師範学校附属小学校初等教育研究会の機関誌として創刊され、現在まで継続して発行されている。

Ⅱ. 「全国裁縫手芸研究発表大会」について

「全国裁縫手芸研究発表大会」（以下、「大会」と省略する。）は家事及裁縫社の主催で、1938（昭和13）年11月5・6日に、東京の日伊文化会館で開かれた。大会の様子ならびに研究発表は1939（昭和14）年1月発行の「家事及裁縫」誌上に収録されている。43名の発表者のほかに来賓、

表1 手芸に関する発表一覧

	発表者名	所 属 校	発表題目
1	山田敏子	神奈川県金田尋常小学校 訓導	裁縫手芸家事科に於ける創作心の養成と 其の指導法
2	木村トミ	前橋文化女子技芸学校	現代に於ける我服装界の動向と和裁と手 芸との交渉
3	富田磐吾	東京成蹊高等学校助教授	小学校に於ける手工、手芸教育について
4	知倉亀千代	東京市月島第一小学校	生活潤化への手芸教育
5	菊池キヨノ	岩手県師範学校訓導	小学校に於ける手芸教育と其の系統案
6	松崎八重	京都市第三高等小学校訓導	手芸教育への歩み
7	田河誠江	滋賀県師範学校訓導	裁縫・手芸科統合的取扱の一端
8	大澤ミヨ	岩手県上野小学校訓導	郷土更生に立脚したる伝統手芸の研究
9	杉本茂晴	東京市荏原小学校訓導	国家動向に立脚する手芸教育
10	山脇敏子	文化服装学院	手芸を主題とした着物創作
11	岩本許子	エーザンス学院	洋裁手芸一元化
12	岩崎正子	文化服装学院	流行によつて表はれたる手芸
13	岡登貞治	東京女子美術工芸学校長	廃品更生の工芸的努力

傍聴者を含めて 183 名が参加した。43 名のなかには裁縫科教師や手芸科教師のほかには洋裁学校や婦人雑誌関係者も含まれた。

手芸に関する発表は、題目に「手芸」「創作心」「工芸的」を含むものをあげると表 1 に示すように 11 本があげられる。

Ⅲ. 「裁縫」と「手芸」の関係を考える上での問題

1. 「手芸」の解釈

「裁縫」と「手芸」との関係を検討する際、「手芸」の解釈が問題となる。

そもそも、明治初期の手芸は養蚕、製糸、紡績等を含むもので衣に関わる女性労働を意味し、学制期に女兒小学に置かれた「手芸」の内容はほとんどが裁縫であった。手芸が女性役割の象徴的行為として社会に定着していく過程を明らかにした山崎明子によれば、「広範で雑多な日常の手仕事を表す前近代からの『手芸』が「狭義の家庭内装飾品を制作する『手芸』」に変化したのは明治 20 年代である³⁾。このことを前提にすれば、1903 年に高等小学校の加設科目に認められた女子手工科の手芸は、現在に共通する趣味的意味をもつ狭義の「手芸」となる。

富田磐吾（東京成蹊高等学校助教授）は「手工」が工具ないしは工具と簡単な機械を併用して「工を行う業」であることや、手先で行う工芸あるいは手芸であると述べた⁴⁾。このことは、杉本茂晴（東京府荏原小学校訓導）が⁵⁾手芸を「手工芸」「自家工芸」ととらえていたこととも共通して、手工、工芸、手芸を近接した関係で捉えていたことが分かる。また、富田は手芸については、「日用実用の物品を各人が思い思いの装飾を加えることが広い意味の手芸であって、婦人の手仕事装飾化される事」であると定義し、女性が家庭内で行う手仕事のひとつに位置づけていた。

2. 手工科における手芸教育の目的

裁縫科と手工科で扱われる教材が類似していたとしても、教科が異なる以上、そこで扱われる手芸の教授目的は異なる。ゆえに、裁縫科および手

工科における手芸教育の目的がどのようにとらえられていたのかを確認することは必要である。

1900（明治33）年、尋常小学校に手工科が加設される際、小学校令施行規則で目的については、「手工は簡単なる物品を製作するの能を得しめ勤勞を好む習慣を養ふを以て要旨とす」と示された⁶⁾。女子手工科の加設や手芸の導入が明示された後も、「手芸」についての目的は示されていないが、手工科の目的を基調にすれば、手芸の目的は簡単な物品の製作を通して勤勞の習慣を養うことにある。ただし、山口県女子師範学校附属小学校ではこの物品の製作について、「単なる技術の為の技術、所謂末梢的な技巧」に捉われるのではなく、製作活動を通して人間性を陶冶することを重視した。それは、人間性の陶冶が「価値創造の原体」として製作活動を支える「文化創造の原動力」になると捉えていたからである⁷⁾。

杉本は手芸を工芸の一分野に位置づける立場から、手芸教育に、「実用的価値」「芸術価値」「創造価値」を求めた⁵⁾。そして、「手芸は人間生活に基調し、人間生活の拡充を期する事が重要な目的である。」とし、手芸教育は学習者の自発的学習と創造性を契機に、その過程で勤勞勞作を通して表現を価値的にし、生活の拡充、生活の創造、文化の創造へと進展させることが重要であると論じた。

伊藤信一郎（東京高等師範学校附属小学校）は、手芸教育について、「日常生活に必要な装飾的実用品を作らしめて、手芸に関する普通の知識及技能を得しめ、意匠を練り、綿密・忍耐・節約・利用等の習慣を養い、趣味を高尚にし、美感を啓培する」ことを挙げ、陶冶価値が顕著であることも加えて尋常小学校及び高等小学校の女兒にふさわしい内容であると述べた⁸⁾。

3. 裁縫科における手芸教育の目的

「裁縫」と「手芸」とは、ともに古より女子の嗜みとして重視され、技術において多少の相違はあってもほとんど同一物のように取り扱われていたと語られている点では⁹⁾、その関係は裁縫科教師にとってそれほど大きな問題ではなかったと思われる。

裁縫科教師の菊池キヨノ（岩手県師範学校訓導）は、製作ならびに完成までの過程にともなう「困難、精密、忍耐」について、教材は「最も身近な親しい題材、材料」であるために、「楽しさの中にある必要感、或いは精神的満足の中に、例えば古いが故に、時局がら、工夫創造し、時の経過も忘れると言う心一杯で努力する歓びを知っています。」と、人格陶冶の側面を重視した¹⁰⁾。そして、手芸教育は「工夫し創造し構成し審美等の能力」とともに道徳的な情操の陶冶、さらには品性陶冶にも重要な位置をしめるものと捉えていた。以上のように、陶冶教育としての側面は裁縫科と手工科とともに重視されていた。

4. 裁縫科と手工科の間での差異

佐藤平太郎（実践女子専門学校及び女子美術専門学校講師）は手芸と裁縫との違いについて¹¹⁾、裁縫は「大仕掛けの着尺の布帛を衣類として縫う」のに対し、手芸は「巾着・紙幣入れ・ハンドバッグ・手提げ袋等の小品に限」る点で本質的に異なるとした。また、裁縫は「裁断工法と縫工法とが主要工法」であるに対し、手芸は「編工法・刺工法・染工法・切付工法・縫工法・かがり工法・組詰工法・・・等」であると説明した。

手工科と裁縫科との間で共通点が確認されるが、手工科教師には、裁縫科における手芸は手工科の教授目的が十分に生かされていないうらみがあった。富田は、手工科教育の現状について次のように述べた⁴⁾。手工科では、「同じ手芸でも尋常小学校では手芸と称せずして糸布細工と称して随意科目であり高等小学校に於いては手芸と称して女子必須科目であります。然し此処に一つ注意すべきは、手芸は高等小学の一年のみであって高等二年に進めば竹木細工。三年に到って木金工を課するを本体としているのでありますが、多くの小学校は一年、三年共に手芸を課している様な有様であり且これが、裁縫か、手芸か、手工か其の本体をつかむに苦しむ様な物を多く課しているのを見るのであります。」と、手工科を超えて実践されている手芸教育の現状を批判的に述べた。そして、「手芸を手工科の、また手工科の要旨によって教授しなければならぬと考えている人の少ないのは甚だ残念に思う次第であります。小学校の手芸は裁縫科の要旨に

よるべきでなく、手工科の要旨によるべきである事を特に申しておきたいのであります。」とも述べた。

以上のような混乱が生じていた要因として、小学校裁縫科教材に雑巾・風呂敷・糠袋・お手玉等、女子手工科の「縫取」「布片細工」に共通する教材が含まれていたこと¹²⁾、女子の手工科を裁縫科教師が担当していたことや教室を共有していたこと¹³⁾、また裁縫科教師が尋常科で女子の手工科を担当する場合、糸布細工や布片細工等と言わずに「手芸」と称して行っていたことが挙げられる。学年や時間数等、手工科の範囲を超えて手芸が教授されていた中での戸惑いは、裁縫科教師よりもむしろ手工科教師の間に広がっていたのかもしれない。

「全国裁縫手芸研究発表大会」で紹介された「京都市手工教授要目抜粋」（表2参照）を見ると¹⁴⁾、尋常科5・6年の女子の手工科では「紙布細工」に全教授時間の半分以上を使い、さらに高等科2年でも「布糸細工」に教授時間が配当されている。ちなみに発表者の松崎八重（東京市第三高等小学校訓導）はこの教授要目をもとに、低学年から「手芸教育」が行われていないことを問題とした。この点を見ても、手工科と裁縫科の教師がもっていた手芸教育に対する認識には大きな隔たりがあったと言え

表2 京都市手工教授要目

学年		紙細工		粘土細工		蜀わら細工		竹細工		紙布細工		木金細工	
		時数	教材数	時数	教材数	時数	教材数	時数	教材数	時数	教材数	時数	教材数
尋 常 科	1学年男女	18	18	12	12	10	10						
	2学年男女	20	16	12	12	8	8						
	3学年男女	26	11	13	12								
	4学年男女	48	9	24	17								
	5学年女			10	5			8	2	50	8	9	2
	6学年女	7	2	8	3			10	3	47	8	12	2
学年		製図		布糸細工		木金細工		セメント					
高 等 科	1学年女	3	3	36	5								
	2学年女	3	1	10	1	22	4	4	1				

出典：松崎八重、手芸教育への歩み、家事及裁縫、家事及裁縫社、13・1、1939、p.285

る。

Ⅳ．小学校裁縫科において手芸との関係が重視された要因

1. 模倣から創作に発展する教育

教育方法の問題として模倣から創作へと発展する教育を目指すようになったことが、「裁縫」と「手芸」の関係を重視する契機になったと考えられる。

田河誠江（滋賀県師範学校訓導）は教育方法上の原理から、「模倣の全くない創作は在り得ない」、つまり、生活経験に乏しい児童には模倣の過程もまた重視すべきであるが、模倣のための模倣に終始してはならず、すべて創作を前提にした模倣でなければならないことを主張した。そして、模倣と創作の原理をもとに、模倣を創作力養成の基盤に位置づけ、裁縫科と手芸科の方法的原理の密接な連絡こそ必要であると主張した¹⁵⁾。

松崎八重（京都市第三小学校訓導）は、手芸が備える「個性的なもの、独創的なもの、工夫的なもの」を生み出す力に注目し、手工科と連絡した手芸教育の必要性を説いた¹⁴⁾。根拠になったのは、「図案の如きもの、構成の如きもの」は「立体に相對する時はじめて興味ある」対象に生まれ変わるものとし、立体観を養成する手工科教育を重視していたことにあった。そして、裁縫科における手芸教育が平面構成を主体に模倣的な技術伝授に終わっていることを問題にしており、「女子に於ける手工を無視した事によって工夫創作的な力がどれほど損失をまねいているかを思わされます。」と、手工科との連絡について強調した。

2. 実用性と審美性の重視

裁縫と手芸において、実用性と審美性をともに重視する考え方が両者の関係を重視する契機になったと考えられる。

田河は裁縫科と手芸科の関係を重視し、両科の統合的取扱いについて提案した。根拠になったのは、両科が特性として有する実用性と審美性であった。裁縫科は直接的実用的要素を第一条件とし、手芸科は間接的芸術的

要素を第一条件とする教科とした。しかしながら、衣類も服飾として芸術的要素を多分にもっているし、手芸品も実用的要素との関係が深いので、裁縫と手芸が共有する実用と美の両面の交渉こそが大切であると述べた¹⁵⁾。

一方、両者をそれぞれの特性から区別する主張もあった。田畑きみ子（岩手県）は、「手芸科は実用から一步上にあつてこれは芸術的な部面の勝つたもの」であることを強調した。手芸科でも実用的な作品は多くあるが、決して実用のための労作ではなく、「出発点は芸術的な意識によって美的情操及創作心に働きかけて製作せられるもの」とであると、手芸科と裁縫科の違いを述べた¹⁶⁾。また、佐々木由子（東京高等師範学校附属小学校）は裁縫科の作品は必ず實際生活に活用されるものでなければならない点で、「手工品、手芸品等とは趣を異にする」ことを強調した¹⁷⁾。

田畑は裁縫科と手芸科の関係については、「裁縫は手芸科の一部面を担当するものであるといたい。」「手芸科の目的を達成するための手段が裁縫科においてなされている様に思う。」と述べた¹⁸⁾。つまり、技法上、手芸は裁縫教材に装飾として加えられることが多く、他方、裁縫は手芸作品の完成段階で用いられることに裁縫と手芸の関係性を捉えた。一方、手芸科の目的の中で何が裁縫科教育に貢献できるかという点について、「美的観念の養成、創作力、工夫応用物体の全体観、利用更生、自然との関係に於ける色彩の調和等」を挙げ、これらが裁縫科に応用されることで裁縫科が異彩を発揮するだろうと述べた。

3. 衣服を服飾としてとらえたこと

衣服を裁ち縫いの対象としてのみとらえていた裁縫科において、衣服を「服飾」としてとらえるようになった結果、着用者の個性や着用目的との関係で衣服を考える必要性が認識されるようになった。

田河は、「裁縫科は単に裁ち縫いを教え、手芸科は布や糸類を用いて美的なるものを作るというやうに、いづれも技術本位、結果本位であつた」ことが、服飾の問題および衣生活全体についての指導を欠落させる原因になっていたとし、「今や裁縫、手芸科は視野をずっと広めて衣類全般へ、

服装文化への問題にまで関心をもつべきである。」と提言した¹⁵⁾。つまり、衣生活全般ならびに服装文化を問題にし、これに関わる裁縫科の課題として、「表現への技法」を挙げた。裁縫ならびに手芸による表現は、「文化創造の基調をなすもの」であり、技能教育は「文化創造の教育」であると捉えた。そして、服装文化を創造するために、裁縫教育と手芸教育の連絡が必要であることを強調した。

佐々木は、服飾に関する指導を問題とし、尋常小学校の裁縫科でも、「色の配合、季節と色、柄合の関係、時と場合についての服飾の模様等」の指導に関して、図画工作等の他教科と連絡をはかることを重視した¹⁸⁾。さらに、時代の趨勢に合わせて服装生活全般に及ぶべきことを主張し、「生活本位」「創作指導」「個性の重視」を強調した¹⁹⁾。また、佐々木は裁縫科の教育内容を広く捉える考え方を反映して、裁縫科の対象に、「衣服の使用目的」「衣服の形、地質、色、柄と使用目的との関係」「衣服の作り方」「衣服の鑑賞批評」等を挙げ、教材の選定は、「児童の生活環境から選ぶこと」「児童の直接使用し得られるものから選ぶこと」「服装生活の進歩向上に貢献し得る材料を選ぶこと」「児童の能力を考慮して選ぶこと」「基本的の材料を取ること」等を挙げた²⁰⁾。

木村トミ（前橋文化女子技芸学校）は和裁においても手芸との連絡が必要なことを述べた²¹⁾。服装界の動向は「和服材料に手芸的な傾向をもつものが増加しつつある」ことや、「一部の人々は和服に手芸を取り入れられて、和服の新感覚が作られている。」と捉え、和服に手芸を生かす方法として、「和装の各部分をばらばらにして考えた習慣を脱し」、「えりと帯留めと下駄の緒との関係をもたせる」「衣類の何れかと携帯品を組み合わせる」「紵けた羽織紐が何か感じを作っている」「帯留めに洋服のベルトを用いたりする」等の例を挙げた。

4. 洋裁との関連性

編物や刺繍等は洋服・洋裁との結びつきが強い手芸である。例えば、編物及び刺繍のような手芸的教材は洋裁との関係が強い。編物は「下ばき」「靴下」等、服種としては洋服に加えられる。刺繍も洋服の装飾として用

いられる場合があり、裁縫教材との連絡が必要である。

木村トミは、衣服を生かし利用価値を高めるために手芸的手法を施すことは洋服の特徴だとし、洋裁と手芸とを技法上近い技術と見ていた²⁰⁾。また、「もし洋服が手芸と没交渉であるならば、味のない単調な衣服となるであろう」と述べているように、洋服の魅力を引き立てる上で欠かせない技術と捉えていた。

岩本許子（エーザン学院）は²²⁾、手芸は審美眼、創作力等を養う要素をもっている点から、洋裁になくてはならないものと述べた。また、更生の必要な時代においては、なおさら手芸の知識は必要だとし、手芸の「あらゆる手法を知ってこそ、いろいろの新しい考えが浮かぶ」のだと述べた。

洋裁には裁ち縫いの技術に加えてデザインに関する学習が重要視された。つまり、洋服の出来栄えは一針一針の巧みさよりむしろデザインに左右される点で和服と異なった。このデザインに関わる学習において手工科は裁縫科を補完する教科であったと言える。

佐々木は小学校裁縫科に導入された「簡単な洋服」について、従前の和服裁縫における画一主義を破り、形を自由自在に創作できる教材であること、その「形」は、衣服調製において着用者の個性に合わせて「色の調和」や「意匠の用い方」が重視されることを教えるのに適していることを挙げた²³⁾。

「形」の創作に関連するが、佐々木は衣服の「形」と「使用目的」との関係についてたびたび言及した。両者の関係から²⁴⁾、「その形の依って生じたる所以」を明らかにすることが重大な研究事項であり、「衣服は其の使用目的によってそれぞれ其の形状を異にすべき」ことの理解が得られるとした。

吉村千鶴は、洋服が流行や個性・体格によって形を変えることを踏まえ、「流行によって適当な型、色・柄・地質、装飾などの選択を必要とする。」ことを説いた²⁵⁾。「デザイン」については、衣服の基礎を作るものであるとともに、出来栄えと姿態の美を保つ上に関係があるとし、デザインの目的は「正しく作り、正しく着て美しく姿態を保つ」ことにあり、

「洋裁の第一歩はデザインの指導が必要である。」と説いた²⁶⁾。

黒川喜太郎は自ら提唱した「衣類科」に、手工科で扱われているエプロン、帽子、セーター等の衣類教材を取り込むとともに編物、刺繍の簡単なものを授け、「洋服の袖、衿とかエプロンに一寸した模様を縫うとか、或は無造作に作られた一輪の花でも帽子に添え」たら、どんなに調和美が示せるだろうと述べた²⁷⁾。

5. 更生利用

1930年代後半以降の被服統制下、生産・配給統制や材料不足を背景に、被服材料の節約及び更生利用が国策として推進された²⁸⁾。

更生技術と手芸とは、裁ち縫いの工夫、色・材料の組合せ等が重視されるなど共通点が多い。特に更生利用は被服調達の側面だけでなく、廃品や死蔵品を再び生活用品として活用する手段にもなった。その際手芸は、使用や放置によって損失した利用価値を蘇らせる再生技術として機能した。例えば、染替えや刺繍、編み物等は、手持ちの被服を材料にして色や形の異なる新しい生活用品を作り出すことを可能にした。このように、更生利用は裁縫と手芸の両方を活用する場として生活に生かされた。

1939（昭和14）年4月発行の雑誌「主婦之友」の付録『実用家庭染色の秘訣集』に寄稿された読者の体験談によれば、色が褪せて着られなくなったセルを黒く無地染めし、その上に赤の木綿糸で十の字を細かくぐし縫いで散らしたところ洋服柄のようになり、はからずも流行にのせることができたと報告されている²⁹⁾。これは染色及び刺繍によって布地を更生させた例である。

一方、手工科においても更生利用が重視された。「与えられたる材料を駆使するということにも陶冶価値が存している」として、「お裁縫の切れ布、空缶、空き箱、自然物等」身近なところから集めた物を利用して文化的なものに加工することに価値が置かれた³⁰⁾。

V. 結 語

本稿では、1930・40年代において小学校裁縫科にかかわって、「裁縫」が「被服製作」へと展開する過程で「裁縫」と「手芸」との関係が重視されたことを問題とし、主として以下の内容について述べた。

小学校裁縫科において手芸との関係が重視されたのは、第一に教育方法の問題として模倣から創作へと発展する教育を目指すようになったこと、第二に裁縫と手芸がともに実用性と審美性を重視するとともに作品の製作過程でそのいずれにも関わる技術を必要としたこと、第三に衣服を「服飾」として捉えるようになり、着用者の個性や着用目的との関係で衣服を考える必要性が認識されるようになったこと、第四に手芸に含まれる図案・構成・意匠等は洋裁教材に必要な内容であったこと、第五に手芸は廃品や死蔵品を蘇らせる装飾的・実用的側面をもつ再生技術であることがその要因として挙げられる。

「裁縫」と「手芸」とが本来もっている共通点や補完的な関係を重視したことは、裁ち縫い中心の衣服製作が構成や意匠等を含む内容へと展開する道筋を作ったと言える。特に、流行や着用者の個性によって形やデザインを変える洋服の製作が教材中に増えるにつれて、一人一人への対応、さらには広く服装文化創造の観点から衣服製作がとらえられるようになり、そのための知識・技術やセンスを育てるために、手工科および手芸教育との連絡が求められたと考えられる。

翻って、裁縫と手芸との近接した関係が現代の被服製作にどのように継承されているかについて考えると、「生活に役立つ物の製作」「布を用いた物の製作」で裁縫及び手芸は、物品製作の基礎技術として統合的に用いられ、構成・配色・裁断・縫製等に関わる基礎的・基本的な知識と技術として活用されている。また、「生活を豊かにするための物の製作」として見ると、布に縫製や手芸等の技術を加えて用途と美しさを備えたものにすることで実用品としてだけでなく装飾品や更生品の製作ともなり、裁縫及び手芸は日常生活を豊かにする技術として現代に引き継がれている。

引用文献

- 1) 田中陽子. 小学校裁縫科における洋裁教育推進の背景：大正後半期および昭和戦前期を中心にして. 日本家庭科教育学会誌、47(1)、2004、p.38-47
- 2) 松本しげる. 時局下における裁縫手芸研究大会の記. 家事及裁縫、13(1)、1939、p.82-115
- 3) 山崎明子. 近代日本の「手芸」とジェンダー. 世織書房、2005、377 p
- 4) 富田馨吾. 小学校に於ける手工、手芸教育について. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13・1、1939、p.260-263
- 5) 杉本茂晴. 国家動向に立脚する手芸教育. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13・1、1939、p.314-315
- 6) 教育史編纂会編. 明治以降教育制度発達史、四、教育資料調査会、1938、p.65-66
- 7) 山口県女子師範学校附属小学校. 小学校訓練の実際山口県女子師範学校附属小学校、1936、p.116
- 8) 伊藤信一郎. 手芸と其の指導. 教育研究、初等教育研究会、354、1930、p.81-90
- 9) 川野まさ子. 裁縫科と手芸科との関係. 家事及裁縫、13(11)、1939、p.145
- 10) 菊池キヨノ. 小学校に於ける手芸教育と其の系統案. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13・1、1939、p.268-285
- 11) 佐藤平太郎. 教育審議会案に於ける女子中学校教科中の「手芸」に対し其の改訂を要望す. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13・11、1939、p.7-16
- 12) 田中陽子. 明治・大正期の小学校裁縫科教授法（第4報）：手工科教授との関連. 日本家庭科教育学会誌、43(3)、2000、p.193-198
- 13) 坂口謙一. 1926年高等小学校教育改革における「女子手工科」の成立. 名古屋大学教育学部紀要（教育学科）、39(1)、1992、p.155-163
- 14) 松崎八重. 手芸教育への歩み. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13・1、1939、p.285-295
- 15) 田河誠江. 裁縫・手芸科総合的取扱の一端. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13・1、1939、p.296-310
- 16) 田端きみ子. 裁縫科と手芸科との関係. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13(11)、1939、p.143-144
- 17) 佐々木由子. 高等小学校に於ける裁縫科指導上の重視点. 教育研究、初等教育研究会、463、1937、p.264-269
- 18) 佐々木由子. 尋常小学に於ける裁縫科指導上の注意. 教育研究、初等教育研究会、308、1920、p.56-59
- 19) 佐々木由子. 裁縫教育の帰趨如何. 教育研究、初等教育研究会、397、

1933、p.234-239

- 20) 佐々木由子. 家事・裁縫の教育. 教育研究、初等教育研究会、413、1934、p.248-254
- 21) 木村トミ. 現代における我服装界の動向と和裁と手芸との交渉. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13(1)、1939、p.257-259
- 22) 岩本許子. 洋裁手芸一元化. 家事及裁縫、家事及裁縫社、13(1)、1939、p.318-320
- 23) 佐々木由子. 私の裁縫教育. 実文館、1938、p.162-163
- 24) 佐々木由子. 裁縫教育に関する私見. 教育研究、初等教育研究会、460、1937、p.205-210
- 25) 吉村千鶴. 最新裁縫科教授法. 渡辺女学校出版部、1936、p.187-188
- 26) 前掲 25)、p.195-197
- 27) 黒川喜太郎. 裁縫教授の新研究. 培風館、1934、p.388-389
- 28) 田中陽子. 1937 年から 1945 年までの戦時下における被服統制と供給事情. 日本家庭科教育学会誌、52(3)、2009、p.203-211
- 29) 三宅とき子. 無地染めを刺繍で生かして. 実用家庭染色の秘訣集. 主婦之友社、1939、p.35
- 30) 前掲 7)、p.121-122